

バリュー株ポートフォリオ分析

基準日: 2026年10月
作成: A. I. P 株式会社

セクターローテーション分析で選好する「金融・エネルギー・資本財（防衛）」から厳選する割安株戦略（日銀利上げと原油高を両輪に）

1 前提となるマクロ環境分析（2026年10月現在）

① セクターローテーション分析との整合

今月のセクターローテーション分析で「強気」とした情報技術・金融・エネルギー・資本財のうち、低PER・低PBR・高配当というバリュー株の特性に合致する金融・エネルギー・資本財（防衛・重工）の3セクターから銘柄を厳選する。特にエネルギーは中東緊迫による原油高を受けて今月「中立」から「強気」へ格上げしており、新たに組み入れた。原油高と金利上昇の逆風を受ける公益事業・一般消費財は対象外とした。

② 日銀は9月に1.25%へ利上げ、長期金利3%台で金融株に直接的な追い風

日銀は9月17～18日の会合で政策金利を1.25%程度へ引き上げ、短観（大企業製造業DI+24、6期連続改善）を受けて10月会合での連続利上げも議論される。10年国債利回りは約30年ぶりの3%台で、銀行の預貸利ざやと保険の運用利回りの改善が続く。9月30日も銀行業が業種別上昇率の上位となった。

③ 中東緊迫で原油は100ドル前後、資源開発株と防衛関連に資金

イラン・フーシ派を巡る中東情勢の緊迫とホルムズ海峡の通航不安でWTIは9月に一時100ドル台へ上昇。INPEXは9月に約3か月半ぶりに4,000円台を回復した。地政学リスクの高まりは防衛予算拡大の構造テーマも補強し、重工大手は2027年3月期に過去最高益を見込む。いずれも低PER・高配当の銘柄が多くバリュー投資と相性が良い。

④ 金利・為替：ドル円157円前後への円安戻りは資源・重工株の円換算収益に追い風

9月上旬に155円台まで進んだ円高は、日銀の「次を急がない」との見方とFRBの9月利上げ（3.75～4.00%）を受けて反転し、ドル円は9月末に156.9円前後となった。ドル建て収益の多いINPEXや海外売上比率の高い三菱重工にとっては円換算収益の押し上げ要因。金融株は日銀の利上げ・長期金利上昇そのものが追い風で為替感応度が低い。159～160円では為替介入警戒が強く、急な円高への巻き戻しには資源株の比率調整で備える。

2 最適な構成比率と主要投資指標

■ ポートフォリオ目標配分

金融 (40%)	エネルギー (35%)	資本財 (25%)
-------------	----------------	--------------

※セクターローテーション分析でオーバーウェイトと判定したセクターのうち、バリュー株の特性が強い金融を軸に、今月格上げたエネルギーと防衛関連の資本財を組み合わせ、金利上昇と地政学リスクの双方を収益機会に変えます。

■ ポートフォリオ予想総合指標（加重平均）

約 10倍

平均PER

約 0.9倍

平均PBR

約 3.4%

平均配当利回り

8銘柄

組入銘柄数

3セクター

対象セクター数

7～10%

期待トータルリターン

3 採用銘柄・ETFの詳細分析

銘柄名（コード） ／比率	主要指標	株価上下要因・現在の位置	選定理由・スポンサー評価
金融 三菱UFJフィナン	PER: 約10倍 配当利回り: 約3.6%	日銀の9月利上げと長期金利3%台を受け、利ざや改善期待からメガバンク株に資金流入が継続。10月の追加利上げ観測も支援材料。	国内最大の金融グループとして金利上昇の恩恵を最も受けやすく、自己株買いなど株主還元強化も評価材料。

銘柄名（コード） ／比率	主要指標	株価上下要因・現在の位置	選定理由・スポンサー評価
シャル・グループ (8306)			
金融 三井住友フィナンシャルグループ (8316)	PER: 約11倍 配当利回り: 約3.4%	国内金利上昇と海外事業の拡大が両輪で業績を押し上げ。1.25%への利上げ効果が下期決算から表れやすい局面。	収益性の高いリテール・法人ビジネスに強みを持ち、増配余地の大きさがバリュー株としての魅力を高める。
金融 みずほフィナンシャルグループ (8411)	PER: 約9倍 配当利回り: 約3.8%	3メガバンクの中で相対的に出遅れており、金利上昇局面でのバリュエーションは正余地が大きい。	法人取引に強みを持ち、金利上昇による利ざや改善効果が業績に表れやすい。高配当利回りも魅力。
エネルギー INPEX (1605)	PER: 約7倍 配当利回り: 約3.8%	WTIの100ドル前後への上昇を受け9月に約3カ月半ぶりの4,000円台を回復。円安戻りもドル建て収益の円換算を押し上げ。	国内最大の資源開発企業で原油価格への感応度が最も高い。低PER・累進配当方針と自己株買いでバリュー株の代表格。
エネルギー ENEOSホールディングス (5020)	PER: 約9倍 配当利回り: 約3.3%	原油高による在庫評価益と石油開発事業の増益が見込まれ、精製マージンも底堅い。	国内石油元売り最大手で上流（開発）から下流（販売）まで持つため、資源開発株より値動きがマイルドな分散枠。PBR1倍割れの是正余地も大きい。
エネルギー 石油資源開発 (1662)	PER: 約8倍 配当利回り: 約3.5%	中東緊迫で原油高が続き、INPEXとともに資源開発株として物色されている。	海外鉱区と国内ガス田を持つ資源開発中堅。株主還元強化方針と割安なバリュエーションが魅力。
資本財 三菱重工業 (7011)	PER: 約16倍 配当利回り: 約1.8%	中東緊迫で防衛需要の構造的拡大が改めて意識され、受注残高は高水準。2027年3月期は過去最高益見通しで、円安戻りも追い風。	防衛・エネルギー・航空機の複合コングロマリット。PERはやや高いが、受注残の厚さに対し利益成長を勘案すれば割安と判断。
資本財 川崎重工業 (7012)	PER: 約13倍 配当利回り: 約2.2%	防衛予算増額の直接的な受益者として艦艇・航空機事業の受注環境が良好で、過去最高益見通し。	防衛・航空宇宙・水素関連を持つ複合重工業。三菱重工に比べ割安なバリュエーションで防衛テーマを取り込める。

4 資金投下・時間分散戦略（2段階投資の執行）

【第1弾】現在（2026年10月）：資金の50%を即時投入 金融・エネルギー・資本財はいずれも割安水準にあり、まずは予算の半分を上記の配分比率（40:35:25）で買い付け、配当利回りの権利を確保します。エネルギー株は原油が100ドル前後の高値圏にあるため、第1弾では配分の半分程度にとどめ、残りは第2弾に回します。	【第2弾】日銀10月会合後～11月：残りの50%を投下 10月会合の結果を受けた金融株の値動きや、中東情勢の一時的な沈静化による原油・資源株の調整、11月米中間選挙前後のボラティリティ上昇局面で、残りの50%資金で押し目買いを執行し取得単価を最適化します。
--	--

5 出口戦略（売り時・利益確定の目安）

■ キャピタル利益確定とリバランスの最適タイミング

① 金融株：利上げサイクルの終盤が見えた局面	② エネルギー株：原油の急騰局面で段階的に利益確定
------------------------	---------------------------

日銀の利上げが想定ゴール（1.5～1.75%前後）に接近し、材料出尽くしとなったタイミングで一部利益確定を検討します。

地政学リスクで原油が急騰した局面（WTI110ドル超など）では一部を利益確定し、和平進展などで原油が急落した場合に備えます。資本財（防衛）は複数年の構造テーマとして基本は保有継続とします。



本資料は情報提供を目的としたものであり、特定の投資行動を勧誘・保証するものではありません。投資の最終決定はご自身の判断で行ってください。
A.I.P株式会社 2026年10月作成